小学生の「税についての作文」優秀作品の紹介

徳島県知事賞

「税の歴史」

明神小学校　６年
松　下　　心

「税金てなんだろう」「税金はどのようにして使われているのだろう」と、いつも思います。わたしが知っている税金は、買い物をしたときに消費税を八パーセントはらうことです。学校で税についての授業がありました。税にはむずかしい名前や、初めて聞く税金がたくさんありました。わたしは税金について調べてみたくなりました。その昔、飛鳥時代に租・庸・調という税がありました。今でいう所得税のようなもので、田畑でとれた収穫物を納めていました。調は、十七才から二十才の男性へ課され、せんい製品や地方の特産品、お金が納められていました。これは、国をつくるためのお金、役人の給料となっていました。おもしろいのが、庸です。二十一才から六十才の男性に課せられ、年に約十日ほど肉体労働をただで行います。朝せん半島からのしん略に対して、国を守るために九州や京で働くことでした。今は、お金が税とされていますが、昔は品物や労働力が税になっていて、おもしろいです。

現代の税金の使い道と合わせてみると、よく似ていると思います。飛鳥時代も国を整備したり、国を大きくさせるためや国を守るために税があったと考えられます。昔から税金があることによって、国が大きくなり整備され、今のわたしたちの暮らしは、安全で豊かになったと思います。みんなの力を少しずつ集めることによって年月をかけて、大きな力になり、今の日本ができたと思います。わたしたちが大人になっても安心して生活できる国であるために、税があるとわかりました。将来わたしの子供、孫、ひ孫が大きくなった時も困らないように、税金を納めたいと思います。

今回、税について調べてわかったことは、昔から人は、助け合い生活や国を守るために協力し合っていたということです。わたしたちは、この気持ちを忘れず未来につなげなければいけないと思います。

小学生の「税についての作文」募集（５、６年生対象）は、毎年、徳島県下各単位法人会が中心となって行っている租税教育推進事業で、平成29年度募集では県下全体で1,579点（119校）の応募がありました。

中学生の「税についての作文」優秀作品の紹介

徳島県知事賞

「幸せ」を実感できる社会を

神山中学校　３年
樫　本　千　晶

「どうして、こんなに安いお金で済んでいるのだろう。」

私は、この春から病院にお世話になっている。診断がおりたときは、今後入院や通院で、どれほどのお金が必要になるのだろうかと心配になった。しかし、実際に病院で支払ったお金は、想像よりもはるかに少なかったのだ。

それから数ヶ月して、学校で租税教室が開かれ、税金の種類や制度、使われ方などについて学ぶ機会があった。

私が住んでいる町には「子どもはぐくみ医療費助成制度」がある。これは、私たちの町に住む高校生までの子どもに係る医療費や薬剤費（自己負担分）・入院時の食事代を町が助成してくれる制度だ。私が病院に支払うお金が少なかったのは、このおかげだった。

そこでその他の助成制度について興味を持ち、調べてみると、県にも「小児慢性特定疾病医療費助成」等の制度があった。これも子どもが指定された病気になったときは、助成が受けられるというものだった。

しかし、これらの助成制度には、年齢制限がある。大人になっても引き続き治療が必要な人へ継続した支援をしてほしい。打ち切られると困ると思った。

日本は外国へ多額の支援をしていると社会の授業で学んだことがある。このお金を国内で使えば、病気や貧困に苦しむ人たちに支援ができ、日本は一層暮らしやすい社会になるのではないかと考え、そのことを父に言った。

すると父は、「世界には病気や貧困で苦しい生活をしている人がたくさんいて、そんな人たちのために日本は支援している。日本や日本人だけ良ければよいというのはおかしいのではないか。」と話してくれた。

実際毎日のニュースからも、世界には想像もつかない状況で生活している人たちが多くいることがわかる。私はテレビの画面を見ながら、自分の考えの甘さを痛感し、半ば得意げに父に話したことを反省した。あの時の私は自分のことや自分の身近なことだけに目を向けて、広い範囲で物事を感じることができていなかったのだ。

私は今、皆が町や県に納めた税金の恩恵を受けている。そして私が納めている税金で、誰かを助け、誰かの生活を豊かにしている。私は少し前まで日本人だけ、自分だけ良ければよいと思ってしまっていたが、これらの経験から、税金とは支え合いの制度なのだと実感した。自分の今の生活だけが良ければよいと思ってはいけないのだ。今は助けが必要でなくても、怪我や病気でいつ助けが必要になるかわからない。それに、今私たちが毎日通る道路や、学校も税金によって造られている。今の生活が当然で意識しないと、ありがたさを感じづらいかもしれないが、税金制度は、皆が安心で安全な生活をし、「幸せ」を実感できる豊かな社会を築くために、必要不可欠なものである。これをこの夏、再認識した。

中学生の「税についての作文」募集は、毎年、徳島県納税貯蓄組合連合会が中心となって行っている租税教育推進事業で、平成29年度募集では県下全体で6,747点（85校）の応募がありました。

中学生の「税についての作文」優秀作品の紹介

徳島県知事賞

『明るい未来を支える税金』

山川中学校　３年
住　友　利　帆

私が通う整骨院でのことです。
「今日は結構です。」
私の住む市には、義務教育終了まで月初めに定額を支払うと、その月は同じ医療機関で診察を受ける場合無料になる制度があります。足首を捻挫して通院を続けている私は、この制度のおかげで毎月の治療費が低額で済んでいます。中学入学までは風邪にかかりやすかったし、歯の矯正に通っていましたが、この制度のおかげで安価で治療を受けられました。私がまだ二歳のころ入院した時も、思ったよりも入院費用がかからなかったことを母から聞きました。ふと見上げた整骨院の受け付けには、県内の各自治体の乳児子ども医療費助成制度についてのお知らせが掲示してあり、この医療費助成制度がどの自治体でも行われていることを知りました。もしこの制度がなかったら、病気の度に相当な治療費を負担しなければならないことになるでしょう。
この医療制度は、社会保障のひとつです。私たちが払った税金が最も多く使われているのが社会保障にかかるものです。医療のほかに、介護、年金、子育てにかかる費用の負担をみんなで分かち合い支え合う制度です。
ところが、年金を受給している祖父が、
「介護保険料が高いんよ。」
と嘆いています。年金生活をしている祖父なのに介護保険料を支払わなくてはならないのはどういうことかと思い調べてみると、介護保険制度は税金半分と保険料半分で賄われているようです。今は介護サービスを利用することがなくても、将来介護が必要になった際に介護サービスを受けられる仕組みになっていれば一人一人の大きな安心につながります。介護する家族の負担も減ります。そのための貯金と言えるでしょう。
介護保険料にしても年金にしても、少子高齢化の進むわが国の社会保障の費用が年々増大することは必至であり、将来のためにもお互いが支え合うという気持ちで納税・納金することが大事なのだと思いました。
私は今中学三年生。これまで、義務教育を受けさせていただいています。教科書を無償でいただき、学校のあらゆる設備も、そしてエアコンも快適に利用させてもらっています。毎日のおいしい給食も、税金のおかげで低料金で食べることができています。舗装された道路を通って信号機を見ながら安全に学校へ通っています。誰かが払ってくれた税金のおかげで治安のよい町に住んでいます。
今ある安心は、今までに納めていただいた税金のおかげだと思います。さらに少子高齢化が進んだ二、三十年後もこの不自由のない暮らしがずっと続くように、税金の使い道をよく知って、せっかく納めた税金を大切に使うような賢い納税者になりたいです。そして近い将来、今度は私たちが税金を納めることで、私たちや次の世代のみんなの暮らしを守っていこうと思っています。